

放射光科学第一研究系の船守展正です。『施設だより』を隔号で担当させて頂くことになりました。よろしくお願いたします。

放射光実験施設フォトンファクトリーを組織として再定義することが必要であるとの小杉所長の分析がスタッフに初めて示されたのは、新体制がスタートして間もない2018年4月4日の所長懇談会でした。この所長懇談会では、物構研教授会議の設置に関する提案もありました。物構研のような組織では、トップダウンとボトムアップの双方の議論を上手く融合させて意思決定を行うことが大切ですが、教授会議はその機能を担うものと期待されます。今回の『施設だより』では、教授会議での議論も踏まえて具体化が進められている実験施設の再定義について、少し詳しくご報告させていただきます。

まずは、物構研を改組して実験施設を設置する目的ですが、突き詰めれば、「放射光科学の発展、フォトンファクトリーの将来計画の実現に向けて、組織基盤を強固にすること」に集約されるかと思えます（PF Newsの直近の2号に掲載されている所長の巻頭言もご参照ください）。現在、かなり厳しい予算状況となっておりますが、この状況を打破するためには、組織基盤を強固にすることで研究教育上の優れた成果を創出し、フォトンファクトリーの存在意義を高めることが必須です。厳しい予算状況の中で、ユーザーの皆さんとスタッフの努力により、コストに比して極めて優れた成果を創出し続けていることは疑いの余地がありませんが、ディビジョンメーカーからの十分な支持を得られていないとの認識です。

次に、所長懇談会後の各種会議での重要な議論と決定について、記録の意味も込めてご紹介します。5月14日の2018年度第3回物構研運営責任者会議（物構研内の意思決定会議）では、所長より、放射光実験施設（および低速陽電子実験施設）の設置に向けた具体的な検討を開始すること、また、実験施設長予定者を船守教授として副所長の足立教授とともに検討を主導すること、の2点が提案され、了承されました。5月31日には第101回物構研運営会議（物構研としての最高議決会議）が開催され、所長報告の中で、実験施設の設置に向けた検討を進めることについての説明がありました。9月13日の第103回物構研運営会議では、物構研組織の改組と人事計画についての審議が行われました。この会議では、放射光科学第一研究系・第二研究系と並列させる形で、放射光実験施設および低速陽電子実験施設を設置すること、また、放射光実験施設で重要な役割を担って頂く2名の教授の公募を実施することが了承されました。さらに、前述の物構研教授会議等での審議を経て、10月2日の2018年度第13回物構研運営責任者会議では、研究系と実験施設の所掌業務を含む物構研組織規則改正案と実験施設の英語名称案が了承されました。現在、審議の

場を機構の会議に移し、2019年4月1日付での実験施設の設置に向けた準備が進められています。

来年度以降のフォトンファクトリーは、物構研の放射光科学第一研究系・第二研究系と放射光実験施設、加速器施設の加速器第六研究系（光源加速器）を中心に、加速器第五研究系（入射器）や放射線科学センターを始めとする加速器施設と共通基盤施設、管理局の協力のもとに運営されます。加速器施設も改組を予定しており、現在の加速器第七研究系は第六研究系に名称が変更になる見込みです。そうした運営体制の中で、放射光ビームの生成については加速器第六研究系と実験施設が、放射光ビームの利用については放射光科学一研究系・第二研究系と実験施設が担当することになります。実験施設には、運営グループ、基盤技術グループ、測定装置グループを置くことを検討しています。放射光科学一研究系・第二研究系の体制については、研究主幹の雨宮教授と千田教授、副所長の足立教授が主導する形で検討が進められています。ビームラインについては、研究分野重視の研究系と研究手法重視の実験施設が協力して運営にあたる予定です（改組に伴うビームライン担当者の変更は予定していません）。

放射光実験施設の英語名称は、正式に Photon Factory となる予定です。本稿の書き出しを「放射光実験施設フォトンファクトリー」とした理由もここにあります。今回の改組により、フォトンファクトリーには、組織の英語名称としての位置付けが追加されますが、ユーザーの皆さんとスタッフの研究教育活動の場としての位置付けには全く変更ありません。最後に、個人的な文章の公開に羞恥を感じますが、関連したことでありますので、以下を原文のまま引用させて頂きたいと思えます。「PFとは、単なる施設を指す言葉ではなく、スタッフ・ユーザーも含んだ集合体を指す言葉だと思います。その意味で、私は、すでにPFの一部ですが、スタッフとして受け入れて頂くことで、育ててもらったPFに恩返しをしたい、また、恩返しをできると考えています。」これは、かつて人事面接のために準備した（けれども、使っていない）スライドに残る文章です。

現在、「放射光科学の発展、フォトンファクトリーの将来計画の実現に向けて、組織基盤を強固にすること」のための具体的な方策について検討を進めています。次回の『施設だより』（PF News 2019年5月号, Vol. 37, No. 1を予定）でご紹介したいと考えています。